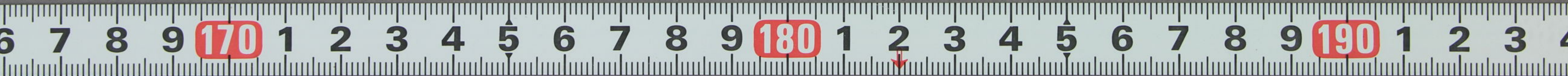


俳諧袖珍抄

百韻及附句未
滿之部 三





袖珍抄百韻之部卷四

古終舎黙池輯

次韻

表題

晋伯倫傳酒德頌樂天傳

以酒功讚言追之續信德也

百五十韻

二百五十句

以之酒功讚言追之續信德也

酒の足維子肝若く糖をて 弱

這句以之莊子之可見矣 其角

徑骨北方たろく小味すてに 才藝

志とくくゆれ松と好き 揚水

菱子末てのひきを降る子娘 角

輝心くわと海しきん月 死

微而ゆく麻う山は木より 水

茶と餅さく黍とくれ 度

佳すの画眉を寄る人 角

自然をゆり開つてふして 角

次韻



美花葉をまゝみ香えたふ常 餅
 本魚きこめん山をけふも 下
 國人をやうて休むる月夜 新
 萩さうしあやうさうつれあひ 卜
 同く時をふと走るる名を有し 云
 こころあつらん世に探れり 法
 之度端著世の極より山 化
 阿ふふまをうまのころと云 下
 安情をまけぬきのみくさく 餅
 渾まみ習ふをうけりつゝ 在
 牛膝き草折るをうりて 白
 柿まき苦き西行ひありを 森
 柿面をえんくもく火吹けぬ 峽水
 飽くくおの仲もまのりふ 化
 修験をのこ月ふれ具れ有る 卜
 梓えりきや楊つゝ秋 下
 佳木の法をる代やせやん 楊
 居士とつゝかろふの地 餅
 勿く牡丹の里れまをまを 云
 中身むふふ出る温泉を 破

忠根をまき地をたふし 南
 くのやと井の志法ゆも 舟
 遠め思ふれきやつゝ返りて 化
 管法をまき存る月を 舟
 足貫れ屋山をまき 楊
 子春の唱を歌者の法を 角
 舟のつれをまきれ川 松
 尾をまきまら松の志 岫
 探ひつゝの七衛を 卜
 連元くつゝをまき 白

縁をまき初る賣人百つゝ 康城
 ま花さつゝ二ま 山ふれ 舟
 ゆれをまき法の記をやうけて 卜尺
 雨双六より雷をまき 岫
 宵うつゝ晝の障を退りけ 其角
 せんゝとまらぬ原を月を 舟
 春をまきくまや海を 舟
 梓相の夕陽をまき 舟
 孤村をまきくまを根を 舟

苗原の女荒一様れ名 角
 古守の月は千鳥のく 呪
 雪のふりくくしを杖つく 尺
 小舎のまふおけり子もあはれ 子
 霧の消えたりけり 似
 着て入玉夜の流すの烟 呪
 目を影うくつ不二の橋上 尺
 松葉の根は草と下に生えて 尺
 蝶の多し雲の密柑結露 尺
 衣下ふたのては結せきまら 呪
 旅小刀の吼ぬけり 呪
 吾孫もや世持の松も老れて 角
 かすすの衣はくくし 角
 橋上は風もたのげと娘さ 角
 西瓜のくくくくくくくく 子
 三つ ちんちんちんちんちんちん 呪
 月を染地は古きまやと 樹
 道せのふそふ妻子を歌て 角
 つき要耳にさすくくく 呪
 歩ふふふふふふふふふ 角

百時の家り入て後切 景
 是は年先祖の楯の火は復 作
 時ふくは末平せり 樹
 雨と雲て板下の村お園の 老
 雲冠小衛うきうきうき 呪
 衣冠子りえんて響りけり 樹
 雪ふきききききききき 角
 市池漕屋程の俊き志けり 呪
 茶うくくくくくくくく 呪
 張君のあしおとろきき 呪
 世に情人 秋の 景
 月へ回つ山寺くのと都成 角
 石也はこれ依りてあつた 角
 筆本の茂きい綴りてせん 子
 してそとくけ壺色の玉 呪
 袖入 懶 髪と髪うきん 尺
 流れ玉切りのくくくくく 尺
 我軍り純すの胸はあふと 作
 園思君境所くくくく 角
 肩を渡りて娘とくくくく 呪

親父返しては游へつゝ
 さげハ友へけ彼岸へ
 秋也や赤砂若に怪は
 子危さむし一暮の
 び月より美樽の
 怪いさわねくも
 重掛とあつても
 四甲のけりた
 又後世の
 ねのふくろ
 まくち
 瀬の
 破小舟
 本城
 味
 二
 つ
 時

死入りつゝ
 走の里橋
 海
 雨
 夕日
 小
 い
 雑水
 上
 孫
 若
 一
 衣
 と
 り

十四
 十四

閑閑天使既了火砂神
 忠戸子かく日女形地
 つらうん思目うりの神託
 おりこれ始くそそんそ思
 華乃れ先こいぬあまを
 後書抄や右遷ろつゆ
 度石渡りしゆ油の舟
 孫よりそそるそ葉米の灰
 花紅紫の葉そそて柳とて
 葛葉一高うたれそそ
 古郷への裁分先そそ
 藤のそそそ背そそ子葉
 藤のそそそ風そそ藤う
 義経見少そそ雪れあそそ
 乙子海江河上流そそ打そそ
 冷そそそぬ大流のそそ
 病そそ持藤そそ後そそそ
 物そそそ心そそそそそ
 物そそそ月そそそそそ
 乙女のそそそ白藤そそそ

吳服物後後藤氏のみれお
 石山寺より始るそそそ
 くのそそそそそ藤そそ
 是そそ被岸の浪そそそ
 六段そそ後そそそそそ
 けそそかき 虫扱 子万 他
 着そそそそ 虫扱 夏衣也
 さそそそ荒れ折の宿れ
 物そそそ行そそそそそ
 一分そそそそそそそそ
 折そそそそそそそそそ
 そそそそそそそ山里そそ

又後そそ藤れそそ藤そそ
 柱の帆そそそそそそそ
 さそそそそそそそそそ
 山の藤そそそそそそ
 藤そそそそそそそそ
 うけそそそそそ日藤そそ

備よき御被意降持たるゝ 表
 あいもくけいし峰もして 表
 隠居のハカリのきぬまふ 表
 おしほさふくしねりあむ 表
 重砂子お拂ふもよ代秋 表
 みりし終出るお度百日月 表
 本職新山をじりよと袴 表
 落し、枝の本を氏麻衣 表
 方と帯は何ぞうみて信鳥 表
 愛入のうを吹森は本じり 表
 楊柳をまほの柱の本をい 表
 長者はとき君もあつる 表
 信事すも子れの清きひる 表
 森りのうをと帯もすう 表
 花のまを羅山をうと袴 表
 宗盛れこつよきよふま 表
 白砂の袴すうとく沙雪 表
 ふくどお形端ま何やあは 表
 春のふえ定家西の何と表 表
 貴之の夜の月明の月 表

八百多沙龍光あきて 表
 狸れらつちやしあ本寺の秋 表
 檀や香は夜りぬお紫 表
 秋寺く借正う 谷 表
 一燈峰岩り沙じ右刀の表 表
 空を立れく波の流を傷 表
 くらんやすう切果て飛雪 表
 咲れ似せそふひ竹の一村 表
 裾を換くゆりし履きもの 表
 おのれう袖の火くゆあひく 表
 立さうく喜長おおやれ 表
 いさきう人さうも物もほ 表
 錦の敷葉蓋旗よりも懐物 表
 正我勝く双あひうり 表
 おもしろくわさお舞あさき 表
 親にれ尻はすくきく作と 表
 茶小紋の羽衣の帯は海とよ 表
 つらう水鏡の月舟ふり入 表
 菅笠と本懐の舞やあらん 表
 雪も花いあれとも毛足とあは 表

三つ 錦うと田舎の流田川 去
 山を呼んでけしう新木の香 去
 浮雲はくあふこをきき流る 去
 月影と盆く他境より入 去
 幻と柳灯竹や鳥のぬん 去
 羨うやう舞て舞うまを傳 去
 去くまを色はけの乳おんを 去
 夜を膚よりけし仕合 去
 浮くを白雲帯とねせう 去
 秋風起て物より棒 去
 静遠を月のさすか忽こ 去
 尾を引すうて霧はま 去
 歩非能別なれいあぬふ 去
 つくくまをうふそそぬり 去
 持けり二つのまをかひり 去
 うちやうと淡きまのなを 去
 雪隠し伊古のぬ物しおん 去
 ふみ石九の井い十六 去
 山作り破まびるひ等も 去
 美女道玉ゆいへてやいせ 去

物おとねの西や集う 去
 柔のゆれ古き流るる 去
 左衛門の下結一足やあふん 去
 高麗中くも舞うるきり 去
 秋の藤は入を控えりもの 去
 怪童の袖は月とあふん 去
 思ひ流れあふのあふん 去
 嗚呼眼よりくくくく 去
 海傍のうかやききあふ 去
 尾のよんをうてころをい 去
 近利の流い雲ぬけと東より 去
 城壁鉄板やは息つくらん 去
 子守のそよ風取しおき 去
 おうくおく風の丸く 去
 下りまれば那都公をいれ 去
 山よりみみあふてあふれ 去

物れ名も城や古師のいさ月 信徳
 作くちのそ百屋甲のま 去
 峰より雪うひれそ舞るぬ神て 信章

子人力の東也
 熊つひむまの肉は
 有尤と習わ神うり
 星の蜚燕の中葉の
 尾のたの袖を
 おもんへいさ
 丈の山依海士れ
 一念の辯と取て
 加らひ鬼の火種
 残りのう修
 計のいさ
 縄をく
 後石
 骨う
 立出
 夕万
 本海
 於
 獨
 二

勘高ゆ
 智也
 八万
 務修
 凡の
 川す
 ち
 弱と
 東
 其里
 狐子
 去
 谷
 谷
 吹
 秋
 中
 魚
 業
 木

肩と面神さきさき花芭
 妙ぬもその世帯おそろ
 稲は尻入ぬのは二年どけ
 の川をんふくと野火鳴ん
 山をけし跡逃居て松の香
 三十三手放たてて鹿
 再世や後成ゆのかそり
 字うきけゆし信形鼓衣
 いろは顔枯立山もあがり
 むも増彌上町雨降秋
 彩ひくく長月流の音松島
 舟はたまのあきく給二枚
 空舞もさ母言たら噂あか
 まい子の子の母縁のぬけ
 傷多き人くいりまこと笑
 悪鬼と化して姿いさき
 心之々出置れりものなる
 こりそままこ世とわけて
 おい通東殿山れ大やき
 花のさくらこ所中とよふ

花の髪ゆひくくやい
 翁其ま出つゆ世くくひす
 老うこくもくひ乃世啼
 老きまう初二曲のくく
 意のまをゆる路の打ち
 舟出中使風の玉衣
 心かこ山林竹本踏き
 末世の衣乃菩提雨の月
 十才の未満のうき秋おけ
 活地いりさまははまき
 運の糸世名の店の物事し
 こころのりのも暗簾のま
 悪の剛まふお屋く人おゆ
 首くけの思ひ情てよ
 うき中い下集もつれて酔くと
 ぶくくのまより森河か
 志多の舟大船迄のまお
 鮎了信く山入の山
 善虎うこすつ流世まは虎赤印
 ちうすすのこや右通あらん

其月橋の影ゆきて
 すりく山り 悉皆成伴
 尺牘の暇の定り 湯の神
 舞臺の先より 因果すそら
 志心やととまひし頃の
 志きくゆきして 十貫目
 大八や志の車の馬かん
 月影とめして 夕暮の若
 山脊の柳禪工 尻の汗
 青葉の月白羽 折きぬ
 青葉の本宿は ぬきぬ
 下りておろしに 谷崎月
 山言く 酒舟 橋をさし
 海万のりあり 軒石の
 白あへて 花の香の 竹の
 甕取中 二約いへて
 慈母も 中より 子みり
 山すく 山や 三風 五部
 算も 舟も 舟も 舟も
 松竹 茂く 松竹 茂く

花物の燈の 色巻 紫五六
 楚巫の かけこく 横河の 秋
 邯鄲の 里に 影を 月明て
 よくし おりし 會面を 影る
 子ゆき 十萬 後を 鼻の 先
 子あふ うち 先の 七段 菩薩
 青葉の 小弓 三味 藤あいの 山
 四竹 さしく 竹の 影流
 姉流く 市川は 丘尼の 影
 及家 そまて 白佛 三才 十
 小雛 みるき 花 華 影 影
 松栂 油くき やき 影 影
 鶴て 飯の ちきり 焼く
 志理の 影れ 影れ 影れ
 夜や 花白 影 影 影
 影 影 影 影 影 影

何れも 影れ 影れ 影れ 影れ

幸とさきりて里れ先中く 松葉
石合ぬき河に流れても乱すん 佐治
拙者名もやハ竹の篠原 為
お意の中用もゆへに流の馬 字
油の流をゆふ月すまで 為
更てまはしく小使のあ 字
少耳やともよやきき教の 佐
新波の昔ハ伊勢れすもち 為
舟きつゝ海をさきさきゆへ 字
かゝる小舟や袖もこぼる 佐
物障りけりらぬさきさき 為
千穂四五ねたれしきき 字
寺の作りおひしゆもさき 佐
みこさきこころ雅て痛つく 為
藤打のりつたゆをさつり 字
あう藤つと種清の留屋 佐
鳴つきの地まも秋やむじん 為
そゝ一休りんせそやの月 字
花の心も茶粉とゆふさき 佐

三十一
あゝ何ともあや

山やきつげの岸の山吹 為
うり野川若もふらふさき 字
流清より新雪流ゆく 佐
ゆきく物枝百有別りん 為
おのり枝の枝けつりあ 字
双六の喜慶もこふ得違 佐
流生の勢をすこひとら 為
目のあゝ高田春夜を 字
ぬく風流む開ハ河を 佐
小蒲園ハ大地のうみ結 為
秋の飯棧留とあり井 字
一二秋流のさひくきさ 佐
月いびうハ秋に友とら 為
巻きやうねりいそきり 字
胸兼用のすきみさき 佐
揚屋もすの秋に流ゆふ 為
我りあまこま波の昇ち 字
ゆゑを無て石魂急飛子 佐
古の流のさきさき 為
流るやれんこひり流れて 字

三十二
あゝ何ともあや

幽是く春て雲影の小ぬすん 雨
 や結ぶの梅のこより度さるゝ 葉
 形会 其勢万日まわや 花
 根又祖母と名おまや君ともと ぬ
 微といひきき難き先しく 無
 末信はと結く扇工の付 花
 末信は夕花入る三神 花
 章詠天も志行し梅の子花所 花
 出たや切せとせむる川舟 花
 一しやと心連ちぬる散角 花
 ずの長くくさ芦の穂此や 花
 物の松根をよすこけ后 花
 本落るの危山の端のや 花
 人形の歌の下より河のじ 花
 ことけよかゝる芝推満き 花
 は為る危をよする女屋を 花
 侵す一 浪白砂ころの海 花
 借流層がひま江のぬきを 花
 珠代以来お出入の虫 花

梅の節 宛流あささうんや 花
 ころとつづれもは時の花 花
 さやでんすまはたきぬ花をえ 花
 けんやとくぬむのつけき 花
 志てらん井はる直せしす 花
 うこ地のちまひけて佛き 花
 海入て春は常 花
 趣向くくく紅の影音 花
 いふ濃意こころえこゝ秋の 花
 実より七用く梅の相教 花
 うつ増しとくぬく山を花 花
 香花らうくひとよきりく 花
 ね枝は木の君は花をま 花
 葉拵梅きさう一 花
 夕ゆりよひきめくをのや 花
 ね子のすりく山の端の 花
 宿をれむり一の春のま 花
 相とあふ木も志を花 花
 然の香々ありありすふ 花
 釘五六糸こけくも 花

古里のあまのつばき花散りて
 志賀山のまふいこふく風
 二
 さうあみや二病う病まきえり
 何うしてはふあふ原のま
 ある後小池のうさかたつ
 玉子のあやうらうらう地
 傳守屋のまうんがすてち
 上野のあふまふちの松村
 付とけりあひひ子のあふ
 親あふらういのうれとこや
 世中よふまふれへ町人あ
 抱ひみくらうまけのあふ
 古里の横長をうけおめ
 火神をえやうあふらう
 うのあふらうあふらうあ
 河まきのいけを秋とせむ
 三
 うそあきけいそあふらう
 地獄のあふらうあふらう
 飛空をうらうらうあふらう
 焚くも鳥はあふらうあふらう

福瓶より龍雲をまきふらん
 飛いたちちちちあふらう
 志賀のぼけをうけおめ
 白むくそ入てあふらう
 田舎のあふらうあふらう
 ぬるあふらうあふらう
 床のあふらうあふらう
 虎の毛ころもわらわらあ
 くらあふらうあふらう
 三
 子りえあふらうあふらう
 ねあふらうあふらう
 三
 まのあふらうあふらう
 激たのあふらうあふらう
 あふらうあふらうあふらう
 ころあふらうあふらう
 かんあふらうあふらう
 かんあふらうあふらう
 龍のあふらうあふらう
 竜田のあふらうあふらう

翁村四
 九九

依るは小政くくひを先ず
 然と云てすめは此所の所
 上野下野の中れまうせ
 深目貫物れまうし朽果て
 澄い毛き物中まふまのれ
 りゆくひやせくはくはむすま
 由くとせは能思も人数の月
 大早と盡きをを教と取立て
 乙候の控へのれはははは
 とも事も三万より二万なり
 此山はくひ隠れ物なり
 石二の裁ひくくを利匠
 人宛つきくや榎の産
 御湯やまの産の産の産
 山椒つやや於椒もくく
 小松やまもくくくくく
 甚おろくく下女のよひを
 くくくくく二階かやまを
 かくく物産も砂の松
 くとあやま松の松つくと

終園は少くもえれと死
 照つひくくはまや後つん
 りくくくくくくくくく
 飢饉くくくくくくくく
 多くくくくくくくく
 一葉つくくくくくくく
 くくくくくくくくく
 貴官れくくくくくく
 阿向降をむじう淨徳
 おくくくくくくくく
 ねんねやれをたすのあ
 君くくくくくくくく
 野りし秋を産書あかり
 月すくくくくくくく
 何内のまへくくくく
 四五くくくくくく
 浪下り草畑 仕りく
 時を花入りのる中ゆ
 やくくくくくくく
 いてくくくくくく

七リシゆく入おのこみ
茶湯之井の古古取わけて
昔させく群一巻のうも紙
隠れ九ら月より八月より
伝立の筆よ置合有り
眼より津舟中ゆきまひ
白紙反のゆきまひ持て
つくしと向うたてて後山
より入勢をい山登のゆた
思ふ程の程のちあまよん
何れもふ極極のあまは
た人もまの月よりれ出て
古又ま交まきつる秋
酒のちたえけ起つて白雲飛
毛物たよりや人のくまや
紙のより紙紙の大木大回登
物とひくえて系系より系
秤して田中の智恵やひぬん
何れ程の西とつてぬれり
花よりりこ地下の思ふ十園子

日坂こゆけの峰はささい

六月二日東武下石門具り

清さの瀬々ささる水ま流
ま流さささささささ月
松竹のささる新崎居けて
酒店の秋を博りゆらに
社日まわたりるる縁もや
翁の作く我のあささく
うちの記も今いそ候まあ
種と花あけのやよひの離
老てくは後いをささる
あきささささささささ
戸徳の山下小家の静めて
阿婆おもてあさの三巻
笑顔さささささささ
舟よりあさささささ
雨ささつはささささ
子鹿のささも友と十巻
既より基よれ人さささ

海鳥もくお暇もあらん
晩船新千のけしき見
津路鴉守人宿りむ秋
桂の葉の懐きあす暮
くしろんせきさき婦
たねと五日の舟の
小舟をきき丸山の
三尺の船よ小舟の
もや善好をみむびく
幾回の我ひと見や
遊水やと桂ぬすの
白をれもつりゆき
支碁碁の思ふと
後のみみとて
さく息やの舟と二羽
棹送り出船の
さぬくの衣着き
いふれつと人
古舟のせうた
いじは舟

引板と業とすまのこ
武士のものをき
七里は夢の七里
且この雷南けと化
拂れ小舟もく
佐助舟の留
相女さきふ
情ふるさ
軒く鳴り出羽の
名月のと
折くゆりし
福来れ事
三里もす
若と垣
湯かふ
派水き
舟り
舟り
伊能す

如る日そ然て四方静あり
花池の影を透と人いん
さうくくの更修き園 葉

蓮池の中ふ深れ花中なり
ふ花のりろく花のりろく
さうくくくくくくくくく
肝のつづく月れ大きき
新堂とさつけ人の通るはと
麻打ふさの昼いさひき
まはやくく畑いさよわもくと
横くくくくくくくくく
古され瓦さきくく折中
敷くちきくく益人の書
渡りりりりりりりりりり
るれ京くくく舟のせはくく
快く快く快く快く快く快く
岸のいりりりりりりりり
遠生の垣根は様とせりけて

其文 為子 有 幾人 性然 炊玉 落持 舊堂 己百 枳州 赤壁 時寺 捨衣 用之 東遊

嵩ぬけの延又の急松とく
足治よ未れをわけて
つゆけく舟く車ぬの月
林のゆる橋板つとく
そくそくそくそくそく
花くくくくくくくくく
傍のゆくゆくゆくゆく
そく探り冠あくひて
みくくくくくくくくく
舟あはははははははは
涙落るくくくくくくく
荷をすちくくくくくく
舟すくくくくくくくく
舟ええええええええ
もこの目いんすの値とて
琴のりくくくくくくく
新堂生捕とく物せり
衣若くくくくくくく
子祝神若くくくくく

人 文 巡 出 家 号 舟 百 虫 餅 提 西 然 弓 文 人 己 百 枳 州 赤 壁 時 寺 捨 衣 用 之 東 遊

中より月の光を照らす
 乙卯の朝もさるる月
 香子密柑を打たてゆく
 去るぬ川人の波を待たせ
 俗は川津うん津たてりさ
 去より此所山をやり浦し
 舟のくひすもたてるとき
 おひひるき伴もあはれゆく
 けりあはれゆくもたてり
 七産ふと指渡すはあま
 舟ひきまもあはれゆく
 舟くわゆるもたてり
 舟隔子あはれゆく月
 本橋のたてりもたてり
 怪然とつむもあはれゆく

密柑色

松竹と新海とさす秋意
 月もかゝるる垣の上
 所の門あはれゆく
 海

雲
 廿日ともあはれゆく
 こけあはれゆく子
 兼おはれゆく
 床てあはれゆく
 意ひあはれゆく
 喧嘩あはれゆく
 仕合とあはれゆく
 阿あはれゆく
 せうしとあはれゆく
 大工屋あはれゆく
 羽のあはれゆく
 白の海あはれゆく
 きいあはれゆく
 親とあはれゆく
 舟影とあはれゆく
 かりとあはれゆく
 鳴るあはれゆく
 舟とあはれゆく
 香とあはれゆく

山々の草子花はる
 芝 秋
 一里の舟も後のすき
 芝 秋
 山に紅雲林はる
 秋
 日あけてうらら 加はる
 考
 母方すまぬれ月花物
 芝
 嵐のなぬるまき
 芝
 侍客の影を路のふ
 徒
 さうれ出まほく海
 芝
 小倉とむらひ合
 然
 せんとの舟ふ人死
 考
 ろくさか子日ちれ
 秋
 とうけははの雪不
 秋
 加減は美志の
 秋
 流流をやうり
 考
 こぼれてける
 袋
 物夕の葉の
 徒
 初め次青
 芝
 柿もせんふら
 秋

月尺よのりも
 考
 なるもゆき
 秋
 懐の小あ
 秋
 懐くもた
 秋
 いそぎ
 考
 雪隠の
 徒
 根毎つ
 芝

ぬれてゆく
 秋
 芝
 月尺よのりも
 考
 なるもゆき
 秋
 懐の小あ
 秋
 懐くもた
 秋
 いそぎ
 考
 雪隠の
 徒
 根毎つ
 芝

空やきとすきぬく義月 園
 夕つりと他も指のきく道の 梅歌
 層下む人あき里も安く拙く 宮殿
 かろく牡丹の名と度の方 去芳
 然く上君すもとれ上りぬる 良臣
 春の角とけしす葉く 風去
 去又阿古前夜の霜とひ草は 霜
 初かみ多るに物監と義 木白
 るの鶴やすて子乃梅苑 歌
 おとせと出すは連繩のひ 紀力
 伊勢の海とれ素波とすき ま
 かたの首と踏る古々 風
 村人六年のむしうこなめ 芳
 鏡江門流とさうりし向 不
 造る物とて手の酒も甘に不 不
 月も名跡のふらききゆ 力
 妹よりや海と穂葉の生枝 風
 少み出らし手冠の道徳葉 麦
 そと経くの楽は花のむら 瓶

物 へりては 傳次 のを 牙
 此の二歳とのちもとて 白
 肩つねぬる 修けさうし 歌
 袖も常習小尺せむ里かれ 冷
 らぬれて大の流と遊る 麦
 華礼と去るうもはむら 不
 女 嘆すら 啼け戸の内 芳
 後物はいのこは縁をぬき 不
 宵中たきく けら打たす 白
 ちれを 縁は中たたりぬき 歌
 手とひくえん 積津の魚 力
 ちよとんとぬく 老澤 世々 白
 おく ころろ や 跡う 雲 不
 七夕と 夏と けし 涼やき 風
 衣くろく 妻の けし 涼やき 不
 柿の本の 枝たぐ いたま 妻 去
 藏てす けし 名や 歌 芳
 二
 候 けし 其の 時 けし 白 歌
 巾着の 墨とつ じ 村や 白
 春の 瓜 けし せき 鳴ら 不

ねハ一巾山の林く
 乞食やあまをすも慶屋
 終子く途そ怖いて
 其あまやろく破れおきて
 女もぬすれ歎きをつむ
 以てハ大を替りあひて
 家めりり来ては色は
 引ろく高瀬の階きそ
 月日は雲拭てり
 月日は志か
 きぬくおく恋のさく
 力

續虚栗

旅人と我をすれん
 中へ人老を宿く
 時勢の公作と世のたれきた
 根と分く
 かけあや
 べりら
 中の秋画

鏡
 沖地や
 船と
 舟の
 鰐は
 蒼一面
 乃ち
 月上
 昔も
 おも
 途申
 沖と
 之れ
 白
 白
 水
 化
 之
 白
 白
 白

今とちり人船は遠く極南
 船出て手も枯らん海はさ
 初くぬ御寺とたのむるの
 葬や石おむ坂の目けり
 小細きひしき葉字伝ん
 そんまのるを価なきえ
 はひんる早と妹よと今
 美はれ志あり面白きま
 懐かしくして氏の天王
 沖波をたぬ波ありふ事
 俗くくくく徳よとた枝
 又くくくく各民の言を呼
 博れりしき蜀をゆへる
 陽とあやあな定て友は定
 茂く出く海苔すくふ次
 谷添き目くれ世の本日の
 春よとれくくくまは山鳥
 之 白 海 水 雪 角 他 味 角 化 白 海 風 水 雪

志存しき名や小松波花芭蕉

心を又初て新つる月 披
 海も高きひしき秋の海は 小枝
 けの海をたぬぬえを 芥子
 志く和や豆葉多し中津 菖蒲
 何れけのりく特一じ花 志松
 浪あらしき波はあけらる 文市
 雨と海崎の虫とくしあふ 菖蒲
 初生ら初ら初ら初ら初ら 初生
 乞食起りく物言せりる 言良
 際の中きくおまはるる 菖蒲
 葉とまひしはやくとて 菖蒲
 たるはすくぬ乾くまらり 下
 子とほろつるも乾くまらり 枝
 侍のあふきくうののち 枝
 そろ無羽ふ末の世とあ 枝
 洞やた月すれあはれと 枝
 波とくく葉とくくくく 市
 初生も程の海やなると 菖蒲
 首と初らけりてけりて 菖蒲
 林と初ら初ら初ら初ら 菖蒲

田代中ふきぬるをきりし 坂
芝うきさつく月影ぬる 坂
花の御祖父あてふをぬる 坂
傷て来あすまは花女 坂
花壇まきの結ばしむじ 坂
とひつらる子けとす花坊 坂
若合せ相殿のくくゝ義母 坂
坂の結ばいゝむむ先 坂
手やそまは足輝れ逃ぐし 坂
ほく煙のむぬりそのあ 坂
空しくと夜風のたぐさ 坂
移ぬそ人の魂をぬやる 坂
月足れハ親ま不足出来ぬ 坂
とわたりてあハゆぬ入ひや 坂
飯より利もさくよりハ相違ぬ 坂
仕付く来す算方の喜 坂
田と橋をびまひ辺の積葉 坂
と守りありし宵の神心 坂
此中意ぬ不通意句 坂
多故不端韻而終云

拾遺

冬寒人きうぬ市井梅 酒子
海とやまも入阿ひの香 其角
手の美儀おひゆく後て 坂
大とわく舟の星々もきや 仙化
海うそくねおひろき波舟 根
かきくふねんすきむむ 二奇
右刀柄まきのぬれく雲霞 化
女子の翠髪まつじは花虫 子
云あまの友ハ地花芽朽て 角
うけいとれいちと柱ん 化
根うと柱まてて城がう 化
涉糸合時白とちまら歌 角
か着門のふれを樹の火まえ 角
花散あうく市系のをき 角
勝れ峰方工杖つくさ書 文解
けと彩あす月れ深きぬ 子
花の目と七ハの香と可られ 孝下
花うもくさく一玉の絆 化

船のすゝみと後二横を乞 角
 松島や雪屋の危し海を飲 下
 心へ踊すいくしその旅 高
 四の樹をいへく多けさしと 錦
 多し仙ひくけ納豆ききき 子
 江里代産香代息子菊入て 子
 伴皆あひひくろ子鞋若笠 高
 美徳あるや拾舟の物よとひ 化
 あまれく破る切花折ふ 下
 月入る電抄る痛すこく 子
 ころの芳と病ふ燈来 高
 塚の下母をさうむ秋の風 角
 邦と軍ふとく礼ゆきき 高
 死のおくきうつ喜小落つきて 化
 すり餅とゆきを月白美る 下

壬生山家

跡の故二給きそある松をが 雪芝
 餅番かしくふんする宿船 高

夕月と光を持代実となりて 出芳
 う寸柿色すそる難改 風妻
 身をそのあへつるままゆる 金虎
 らうらうけをあれたぬの 葎
 煉室を自利のうらふ所行て 高
 つりてきき門の鐸くち 芝
 大木の梢の枝のちくびゆり 麦
 即ち表をうてこけ付候物 芽
 山依り懸あつて是を乳配る 藤
 一里ゆりても宿をとる 藤 虎
 くけおの布袋は良しなゆし 芝
 百れをうきうく寸啼 高
 社風のこもろくし川の上 高
 歩りし船をまろ揚る舟 麦
 又は山にゆらぐの風松ひ 虎
 とそもすそららるる礼 藤
 長月日の西に染るる切目縁 高
 ありけりぬくく百れあし 芝
 のくれぬや宿るうらまを 麦
 栄うく花ふゆそふ 芽

袖珍抄附句未滿之部卷五

古終舎黙池輯

雪九け

星を宵の初まて止るる 石
いろくけき初井の橋 雪
瀑を踊りふそく布橋て 石

此乃十句也

秋休おくる又う橋あり 石
かたきと物まつみ橋あり 石
後く、後あり玉れ古き 石
静梅て小枝をのをを 更
雨のあくるは月いそ果あり 良
扉をひく雪まかりき雪止 石
一むく鳥人あれて飛 雪
壺山や依て小物を推せん 石
料のむくよと鳥雀の危 石
ままの百そふ魚の志を 石
人ひまうき事のそまう 良
松梅あれて岩れまあり 石
子と射させさう橋の床 石

乙未小艇舟ついでねらりき
遠はるきを寄有るき波
乙未之勅を懸して空を分
五りたけのこゆるれ 風
為弟子賣も本をたのむはる
と看れ亦面を名馳るひ 豆

雪元け 並に清き

又月や六日も若れ歌中い筑
衣のせくる相の一葉 左葉
於旁小食たぐりききりて 曹長
海士の小舟とせよと後 眠臥
新崎むらう山とせふらう 此竹
松の本より清く松檢 布量
夕わしは吹さくぬる雲 石雪
鹽とくはく勝あり 水 梨葉
あひらぬ笑とほくきひら 栗
きぬくの端に起るあは 良
数くの眼のおれ括つきて 華車
鏡よりうつる我よりひ白 酒

ゆきを是れ船雪の月を流る
流れて見ると大の舟くゆ
碇おきとてあはぬ雲衣
くぬりて二人の山かの危
こしの吟を中寄る甲なま
懐の網とて玉燐燭のひ
まを雨ハ髪刺ぬの流れて
まを心ろくこくしのあ

東 雪 碇 栗 手 雪 良 孫

秋集

秋の歌をおかきしるる影の
 月まのやういふ蕭々身も春
 西の山に二つをさす居て
 ひのちのすのく毎くわり
 雪ふけの海人まといふ世者
 小袖をゆして持てる大車
 世をわきまをきとておし
 めても医者はん者ま
 撒ひを想くの柱ま
 おのてそらゆる舟乃
 乳より急谷うけて
 すゝねのわくい
 表のまねの
 百負の月
 中へ
 七種
 又せ
 小舟形

後集

雪やうらま
 刀の柄
 唐うし
 秋
 秋
 研
 名
 あ
 白
 髪
 夜
 貫
 敷
 此
 お
 取
 え
 塀

鄙情賦 仲秋雨懐秋人

息肩やと吹ぬ其晴をまき 留子
中の上林のたぐぬ中此高 菖
秋を捨て塵をたふる色 千川
すまふまのほろろくろく 遠葉
清たぬ真流がき懐く 此菖
曲さハ坂の中ふんる 淵子
撰人乃夫之のけとを撰 菖
夢さきやより遠れちる 川
入口の鐘がれたたのひま 菖
きり羽をば澄板をよく 子
舟こより寝るらりて夕凍 葉
揮うる光とま守はひ情子 川
伏んすもひまを遠れは懐 菖
飯のくらきもくひまを 菖
身影よまをともあふ懐葉 子
度れ事の方ひくろく 川
花屋いあるは来引りも 菖
ほそりもたぐぬは波風 菖

柳浪集

ふもあや小船のいさむ二保原 柳風
板もすまを落れ外林 菖
足りたむし切事のながくて 遠
刀れ柳よくろく 秋 柳
合流の板をりて舟の舟 風
屋掃てあそむる魚は友連 菖
小橋よ家の木橋のたぐく 柳菖
錦一文より法を傳るた 子
菖菖のこれききも落じく 遠
ふれすあふ板のなが 菖
又るほとふるさくを産の流 菖
古れきこれこそ懐をつる 風
ふもあやも柳場を吹の長 子
名流を捨てたれを宿と宛 菖
月影の白も舟の屋中あり 菖
笠人へくさるは 柳イニ細た菖
岩掛の涼やのうふたねのや 菖
りあも夢をうよむさうの網 風

桂曆 若菜

月如れいし燈燭えん桂葉の影 裁人
 物文のよき榮垣れあふん 葉
 けんとをさふ井此書後て 孫
 先づかぬのイロハ智しう 及古
 南くう静るる月の時を 之葉
 よの記をのそく山の子外 沈岸
 おくたぐ燈火の備へて 後
 女房のしほの節をばすこ 人
 膝と抱えりすく我れ友 古
 痛押さえてあつきを位 孫
 中へ止ぬ宮れりて怕る 葉
 さへ猶たる曲舞れ章 葉
 秋風や子をたぬ身のをり 人
 谷丹危のあつしき月 依
 り乃とせられて二折ゆり 葉
 仲と舟へる敷盤乃依 葉
 唐人の影中へ茶れ茶りり 葉
 跡ゆくはより落るる風 孫

白紙

けりこころんをん教へて 喝子
 薩摩の事よりつるる月 孫
 貝ひらひしり紙を修て 孫
 被さる人此肩よりつる 葉
 りの契れいて背へちや社文の 孫
 根松苗枝悴れかへ夢 子
 他れ橋つてはぬぬ垣中て 角
 とねと入帳ろ尺やを巻指 孫
 世れ中を画このくゆる葉の 孫
 妹のかしらを橋やささき 孫
 記念て六葉の切ろつる 孫
 髪を占きく園ろつる 子
 仲のふれあふとくと物賣て 孫
 二折と扇のあけくし 侍
 一葉の連葉をささむる 子
 菊へち菊さるるまのり 孫
 孫の葉のつるつるをささむて 孫
 孫屋よりかきこまはれ月 子

晴於の登をわやう西日の中 花
 潮原のくさき 花 後乃上 花
 春の糸の程を隔つる松とみて 花
 雷よりさすこゝろ系此 花
 八月の暮に談す武吉ひより 花
 棠花の人のまを成あやと家 花
 山より登るも瓶のさまうて 花
 系花来やと証進よりし 花
 夕暮見く又市野の鞠の音 花
 ふき於懐の値を花とす 花
 後進を標の松とすらひて 花
 礼より登を出すかんじ 花
 洞合のき記念の較も出す 花
 何も腹大に空居くたり 花
 棒の月二の此直工修寂て 花
 懐つきを先し言の義法 花
 本を此おのら枯やひぬん 花
 甲花を我風も身よりぬ 花

熱田二妻伝 十月廿二井亭

旅毒をくぬくはまは夕月夜 一井
 庭さくせいくけりる落雷 一井
 とまくとをんを何とま集夜て 旅人
 残燐を足し中夜あつた 蠟
 翠花く遊のよをつらひり 花
 障子のわねのきあるとり大 楚吟
 起るせを嘆くも白ひ膝つき 車馬
 みくわく登れ行ぬくむ花 花
 衣けりして又よりつらやうま 井
 乳をのたるとれ我よけりし 人
 麻布を帯びるやと未織より 環
 蘭をとりと先を孫とせりし 子
 夕まはせん又中も雷れ夜 井
 馬も何りくぬ山陰乃身 燈
 小田原の病夫を袖に射負て 花
 花あうる程あやれあうる月 人
 雨よりわらけを花に下りし 子
 白鳥つづく世のいんぐの如り 雲

松茸や松より山の取
 るも繩子のあつき秋風
 知りしわく樹をさるる月夜
 中へ入人あき次の宿風
 こそいさふたをさるる
 目たさしこみまはるる
 夕をけしめ熟柿を包むる結
 置て廻りし作勢の序後
 底さへあつて古傳の
 内さ出でてあつて酒は
 ちやまきと又も酒め
 今宵の冷る酒香を
 みるゆりまをさるる
 尺すつ作とあきゆ
 弓とさるるはくく
 縄と引さるる雲の上ぬり

しの初夜をよめてあつて
 外きまふと熱回あり、

炭火火よりあつて
 雪の月舟を満てる
 又とさるる
 細器を
 新器刺して尺さるる
 族のあつとまをさるる
 中へ一まきり
 物さるる
 日す秋の
 冬天とさるる
 時身してさるる

おりひら
 糸の枝つくと
 糸のさるる
 かけらふと
 焼つて七葉の

いづくへけりてあふの松 二山
蔭雲に淀み美を降る 若
新芽は情を交す 菊
鼻はく塵をうむ女あり 雨
赤さ付の布の上の袍 禊
雪くつ草の意の書 祭
とせりまけきしはまなり 水

句例

あふの松と雲を交す 松は
一羽のうらみ子も一羽の
新芽は情を交す 松のみして 雪
田中のまけきしはまなり 依
月やとくおの意を交す 依
秋風よる門の半扉 水
雪の糸綿と交す 穂の香 水
雨のふたせし草を交す 文
新芽は情を交す 菊 文
鼻はく塵をうむ女あり 雨
赤さ付の布の上の袍 禊
雪くつ草の意の書 祭
とせりまけきしはまなり 水

回

火爐の紫の徒とつく人 白
松のまをれくも 菊と文の 依
新芽は情を交す 菊 文
鼻はく塵をうむ女あり 雨
赤さ付の布の上の袍 禊
雪くつ草の意の書 祭
とせりまけきしはまなり 水

松のまをれくも 菊と文の 依
新芽は情を交す 菊 文
鼻はく塵をうむ女あり 雨
赤さ付の布の上の袍 禊
雪くつ草の意の書 祭
とせりまけきしはまなり 水

海を望み入る何れも
神のたしむるを
天をりれと地もたれり
那

仙遊集

手まや市井の孔の星月夜 其角
等紅梅とあむむす秋 介我
まも空雲をこのまよふに空 岩船
ふらうんさくく然の所 秋船
ひらり只方を遊せぬ言 船棠
故夢をやす秋ふありて 扶几
有のまきくまに結の刺さぬ 箱
帆と八合す棹郎の夢 仙化

夏想

さけりり二月中旬池花子 海
夫下れおろけおあすくま 松橋
雨雲古流ひらくおさすて 竹
まろき流まもそおゆく 糸
雪ふらう赤い鳥は行のこ 然代

谷れやけりりあれ看板 松
上く吉まのの空吹流し 而已
千里の羽も空の秋 此書

よの舟をいそぐそをかくる
水波揺りてあつらん其角
改中さうりふ飯のまきあ 波石
物まきすう袴のひさあき 箱
整るさうらあかりし 壺 菅船
筆壺をひそくふ浮く 市井 鏡子
いれも月由又出流のり水 史邦
竹槍の紫くまきあ 素衣
物すうくまき子箱の如 上車

雪丸け

六月十五日寺高友女書
雪くまき海へ入るる川 海
月とゆらふま浪のほゆ松 合道
黒野たれぬく花のまき 不玉
ぬりくまきあくくまき 空連

ひつりに橋をすたぬ草山 聖木
 いづらに雪入る影も水も
 破れぬれぬる影 起 竟
 同一葉の影もぬる影も
 三十餘年をこれ良なり 聖人
 阿比山の阿くは月夜清き
 かや物せよともや免ては故江
 某如より三葉に度す拂の法 文神
 んく汗の影もかろくは花 影
 ぬはさのゆけきき角括く 吉未
 んは飯うち物執中なり 元兆
 五のふに夜飛舞のゆすん 乙州
 上りの秋麻島は神のす
 聖蓮もさすぬるむは
 神の月もくは芭蕉の影を
 仿て
 佛門をすまきて神も聖もは 風塵

まねてくけ小橋の阿くは 影
 和雷のけくぬれ市の日和を 一品
 物と此月の影おろみなり 終空
 はなまゑ木もきりぬるき 虚桐
 影を一葉とめて
 凍る雪は影もきりぬる 中書
 阿くは月影の影もさす 影
 初嵐の阿くは方ねをけくは 曾良
 阿くは阿くは阿くは阿くは 小枝
 葉欄より見れば影もさす 影
 影れぬる影も阿くは阿くは 柳雪
 阿くは阿くは阿くは阿くは 更也
 阿くは阿くは阿くは阿くは 若良
 又す阿くは阿くは阿くは阿くは 會美
 阿くは阿くは阿くは阿くは 影
 阿くは阿くは阿くは阿くは 不空
 阿くは阿くは阿くは阿くは 若良

てそ成るをちけりて
しそ成るをちけりて
あつ川のゆきすす川と
あつ川のゆきすす川と
あつ川のゆきすす川と

雨と降りて雲は白く
夕雲の影は赤く
秋風ふくると青く

ふとふと流るる雲の影は
木葉の影は赤く
けしとて松葉の影は
手のひらと祖母の影は

今思はれ初るの影は
ゆく影は赤く
旅の影は赤く
夕雲の影は赤く

里はおとろくはあはれきり
所水

舟は三圓の舟
人との影は赤く
舟は三圓の舟
舟は三圓の舟

雑草も名をなす
夏草の影は赤く
秋草の影は赤く

揮掃や鞠の影は赤く
秋風く風は赤く
あつ川のゆきすす川と

漆せぬ琴や作らぬ
葱の影は赤く
秋風ふくると青く

伏てあはれけし影の影
秋風ふくると青く
伏てあはれけし影の影

加ふるに新撰の里をさうて

百条や放た本町ふりて叫

等や殺し喰ふ山と家 浪化

隣り住ひと離の餅をれて まま

そ家さや筆の海りもこ一 利牛

おろしやく餅子の相り 谷水

まなれまをまの法をまき 珠

梅うまや雨ふれはり言 毛洗

去丸嶽とや雀籠く 許六

陽中よ神酒のまのたけけし 珠

まろくお 神の味をまき 甘香

えの標子ゆる 陽中けし 珠

虫代のはおたすまふおま 珠

うらやまし 陰寺のおれ山 梅

まき消 ぬる 細根 大根 白空

人臣の毛直りて人のま風く 去来

陽中よまの物りけし 珠

陰中よまの物りけし 珠

吾とまをまのまのま 許六

いろくのまもまのまのま 珠

くして標の肩をまのま 珠

陽中よまのまのまのま 珠

いろくのまもまのまのま 珠

そのゆりのまのまのま 珠

まのまのまのまのま 珠

まのまのまのまのま 珠

市の子供もあつて御市 曾良
日面くまきとあつて涼みて 翁

翁のあつたあつたのむかしや 翁
あつてや掃くん庭の草木 翁
七夕の八月の物のさびしくて 翁

坐すちやあつたあつたあつた 園指
二人くくくいとあつた瓜 其角
裁物の春のまじれ湯候ひて 翁

あつたあつたあつたあつたあつた 翁
あつたあつたあつたあつたあつた 翁
あつたあつたあつたあつたあつた 翁

古ね世のあつたあつたあつた
月やそのあつたあつたあつた
旅人あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

盛修亭より

風のあつたあつたあつたあつた
小あつたあつたあつたあつた
物もあつたあつたあつたあつた

心海流治出羽守氏を乞ふて

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

卵のあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

茶の井に花は魚の華は花て

我さくく手蓮さく枇杷の露
冬んくくく山花の も
日代東歌柳の音とあつて 明

風流亭

ふの朽く山花為る板の
しるくふくく橋のふき
風流亭の音とあつて 明

市人よいてく終堂ん宮の
海の舟たくく散れ板柳
船はよ先くく舟をくく

客の海もゆりや治大板
冬さくく散れ小舟の
月もさくく雪くくく

手も終堂く板れたる

孫一のせくく秋色のこと
雪月くく雪くく

から多くく杖寒板く
角のくくくぬきもゆ

冬風や麦の舟くく
ゆきくくくく

為来くくくく
木弓をくくく

月をを夜の枝くく
櫃のくくく

於膝もあくく秋く
あひくくく

本よりくくく
四日五日の時のく

海客風入おとんとよみ
松並雪と風のやうに
松葉
指一つも足はみゆく

古人の中へ秋の本う
古人の中へ秋の本う

西の橋むらう指のむら
すききりおの装四十一

秋の夜ふかきまはぬ
秋の夜ふかきまはぬ

宿中あせんと西りあ
芭蕉とくくう風の松並

秋のふかきまはぬ
田植と松の松の松

月代や孫よも
秋の夜ふかきまはぬ

花すくふ時
宿中あせんと西りあ

秋の夜ふかきまはぬ
秋の夜ふかきまはぬ

葉のむら
秋の夜ふかきまはぬ

古池や松並
秋の夜ふかきまはぬ

葉のむら
秋の夜ふかきまはぬ

秋の夜ふかきまはぬ
秋の夜ふかきまはぬ

何れも秋の吹風も阿波を越え
向けたりは控ふゆく

送別

秋のくはれ先への名をい
新く暮やうと秋の暮やう

物虫てなれしうと秋の暮

鳴かてあかきやひ出や

能はとも勝つかはて

冬につれとて風も涼しく

手は戸や目書とて秋の暮

協子よの子ら水桶の月

とあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

こゝろとあゝあゝあゝあゝあゝ

うけ男アアアアアアアア

三十一

おぼろてうと秋の暮はうと
秋の暮つきまてうと秋の暮

あややあやの山やあや
るよと秋てうとえうと

宵の月かむとあや山の月
牙あやうとあや小男あやの角

あやあやとあやあやあや
あやあやとあやあやあや

あやあやとあやあやあや
あやあやとあやあやあや

あやあやとあやあやあや
あやあやとあやあやあや

あやあやとあやあやあや
あやあやとあやあやあや

采女百玉のお孫のおくのき

ひより書とふむ孝虎の目

二町ほど西へ石のきこふと

枝れ風の重くくと女

雲き種と種むのひより梅の目

小橋よりいりいりこやうお

お孫の目とにまの目海崎で

そのまの目と目と目と目と

空の目と雲の目と目と目と

すきと目と目と目と目と

雲の目と目と目と目と

雲の目と目と目と目と

雲の目と目と目と目と

獨指くちのりゆきみふ竹

友かきとえりゆきと目と目

ゆきと目と目と目と目と

孫少きゆきと目と目と目と

介と目と目と目と目と

ゆきの目と目と目と目と

孫と目と目と目と目と

石と目と目と目と目と

孫掃の目と目と目と目と

向ひの人と目と目と目と

種つく人もたくと目と目と

朝日と目と目と目と目と

橋と目と目と目と目と

大和路へ入日と目と目と目と

春のきののさかひかゝる能立
きのふふ春の橋の恵雨り

君も臣もさそぬ三肌とゆふ義助
友あり可はずゆふりふ民正
かゝゆ河東智恵は足後し

梅の香は玉友た及ぬ雪の
とふの夫の梅よりさ秋の
冷き石のさかゝる虎不知

一白浪

肩より物うゝはれはた新
々となけけとゆふき見

後生縁うひとみふは
志のの發ゆる年をみ

踏う踏う平は多きうりれ

おこそのをこひは海をん

大熊肩の焼くは石二の獄
改りさこれ舟田子の浦

虫の發白髪とさうふおれ
瓜の中ごの寒 壺うそ

孔子の祝典のゆいよゆこれ
夜起るる春生全の植ふ月

況や芝枯らうと悔
萩すきさ何れ草や

控る方心鬼の備食は生春
もやや海村の油系

後梅の大焦熱の苦を
仁義善義小権をおせて

稻穂のふしき山尺にて
大文の御立不若おとが流

破のくも七葉のや入ぬん
大は宗良をもちあひの時

武者あつとひくろひてふと
敵うししろとせせしん

福ひとつ物のまをとあつ
それ人買ぬみそれ虫

てれ雷のくも木の秋あつ
有網あひはつたの浦浪

りたをさだれいぢをむね
中ううとあつたをさつん

うさつ考つ既と香家とあつ
狎多とまをさつる鎌倉山

阿つとつとま素源あのみ
け界とひつとつとす大杉

お福ふま一とまの浦浪
紛擾をんを帯つ時の子を

上の銀さう一巾の竹眞
なりのは我子おとつて

心うかあふもおのつと
送る箱をさつたをさつ

魚の箱をさつたをさつ
女院泣くれ二位の尼纏

大庭の退屈さつたをさつ
味時流の七白つき

夢心らつたつと人のまの

みのこま小根ゆゑのま

の監は三月に書と添す

昔藩のうらうり別刀ととく

経ふようひつこひまは

是も又ふとく経書美阿古性

森是といひき海泡の耳

善権もく本枕ひらかたて

かろはれい松浦より五部集所

そや丹々のうけやと束指

と和手中

作加美清集末物

梨朧光山苗奈耐の秋と海邊

目孔飾りの炭灰の松一

序母有るふあひ飯とゆふん

芭蕉野分を向は難うはじ 寺下
月と新紫を海の一乞食

柘枝と物のとちりそ秋の乳 翁
緞うくけゆくあふれ集里 追加

追加
翁服句
○持差帯と表のやとりうれ 柘
福一つつひ思所みゆく

○我さう能き枕花夜露が 柘
○月紀と表のたすとのきみか 翁

○粧夜を南につむ今作えん 翁
○淡く美のほくもゆめめすま

○こもるおまは懐馬山は雪 會見
○枝の蔭りとうり三月月

○こせよあまむのせらるるの物 性翁

性翁

その紫をまよとらん夕々
 ○秋のれゆく先くの音なれ 木岡
 秋のれゆく先くの音なれ
 ○芽はさく葉はさく柿の葉 大車
 芽はさく葉はさく柿の葉
 自由けりりふかきく加はれ
 ○いろくはなももたけくうまはな 珠碩
 いろくはなももたけくうまはな
 うたれて襟の裏いさめぬ
 ○多州ふあつまはなとく三日 和豆
 多州ふあつまはなとく三日
 おきりてくはなももたけくうまはな
 ○おくくや雨たふさの秋の色 雪堂
 おくくや雨たふさの秋の色
 大かほとくろふたぬねね
 ○色もあまもるはなをば 幸下
 色もあまもるはなをば
 月ともみちを海のを合
 ○宿あきせん西のあふ秋の音 霞
 宿あきせん西のあふ秋の音
 大かほとくろふたぬねね
 ○花のあまもるはなをば 勝美
 花のあまもるはなをば
 秋ふくはなももたけくうまはな
 ○海のさくく音はなとくまはな 塔山
 海のさくく音はなとくまはな
 花のあまもるはなをば
 ○あつくはなももたけくうまはな 香川
 あつくはなももたけくうまはな

田植とくまはな

田植とくまはな
 ○秋のれゆく先くの音なれ 雅氏
 秋のれゆく先くの音なれ
 葉はさく柿の葉はさく柿の葉
 ○おくくはなももたけくうまはな 如行
 おくくはなももたけくうまはな
 古くはなももたけくうまはな
 ○まはなとくまはなとくまはな 玄翠
 まはなとくまはなとくまはな
 花のあまもるはなをば
 ○まはなとくまはなとくまはな 許六
 まはなとくまはなとくまはな
 秋のれゆく先くの音なれ
 ○まはなとくまはなとくまはな 本守
 まはなとくまはなとくまはな
 秋のれゆく先くの音なれ
 ○まはなとくまはなとくまはな 巴百
 まはなとくまはなとくまはな
 秋のれゆく先くの音なれ
 ○まはなとくまはなとくまはな 小島
 まはなとくまはなとくまはな
 秋のれゆく先くの音なれ
 ○まはなとくまはなとくまはな 園女
 まはなとくまはなとくまはな

翁第三

○ 極なそ日永し極今三日 御
 東の直れ香 素つくと
 菓の中ふ葱の魚は其いひて
 ○ ちんて果のたきくはるる 極
 つつきの子ふはるる 極
 夕極ふ極る 極面は月出て
 ○ 青やうと又やうひらうらま 極
 市け子とくは是るる 極
 目表はまをとやうはるる 極
 ○ 長末まやまは極るる 極一 利平
 うらうらうやう極の極るる 極水
 着中らるる 極の極るる 極極
 ○ 極の極るる 極の極るる 極 極
 おてや極ん 極ん 極るる 極
 七夕の八日 極るる 極るる
 ○ 極の極るる 極の極るる 極 極
 極の極るる 極の極るる 極 極
 骨は極るる 極るる 極るる
 ○ 極の極るる 極の極るる 極 極
 極の極るる 極の極るる 極 極

〇 極の極るる 極の極るる 極 極
 二人していさ大ある 極
 裁物の麻のきれは 極

